

忘れられない言葉に

★
一般部門
入選

【千葉県・小林利恵子】

「この子は生命力のある子よ。大丈夫！ 元気に生きている」
妊娠5カ月の安定期に大出血。

切迫流産で不安いつぱいの私の手を握り、にっこりほほ笑んでくれた看護師さん。その言葉が「この子を助けて」と叫び続けていた私に、安堵と頑張る強さを与えてくれました。遠方の母や単身赴任の夫が駆けつける前のことでした。

長い入院を経て、無事に生まれたのは女の子でした。病気ひとつせず、反抗期もなく、素敵な女性に成長し、大学3年生になつていました。もう少しで親の役割も終わる寂しさと幸せ—まさか、もう一度、娘の生命が危うくなるなんて、夢にも思いませんでした。

体調の異変に気がついて受診。くだされた病名は「腫瘍」。良性ではなかったのです。当初は、命の期限さえあり得る状況でした。

「何で？ どうして？ 私でも主人でもなく娘なの…」。自分を責め、運命を恨み、娘より先に、私がいっていききました。体重もキロ単位で減るばかり。手術の日は、

前日から眠れず、泣くこともできず、娘の手を握っていました。その時でした。

「この子は生命力のある子よ。大丈夫」

あの時の看護師さんの言葉が、突然聞こえたような気がしたので。そう！ この子は生命力がある。絶対に死んだりしない！ あの言葉が私を再び前向きにしてくれたのです。

その後の抗ガン剤投与にも耐え、副作用から解放されるのに10カ月以上を要しましたが、娘は留年することもなく、この春社会人になります。

今、娘と機上です。憧れだったモンサンミッシェルへの旅を娘がプレゼントしてくれたのです。隣りの寝顔に、生きていてくれてありがとうとつぶやきながら、20数年前の看護師さんの言葉に、手を合わせる私です。2度も、その励ましに救われました。母娘とも、元気で生きていきます。ありがとう。